・楽しく ・見て ・学ぶ
MUSEUM NEWS
博物館ニュース
徳島県立博物館
No.79

アリス
（神山町神領小学校所蔵）

答礼人形「ミス徳島」
（アメリカ合衆国ノースウェスト芸術文化博物館所蔵）

1920年代、移民問題を中心に日本とアメリカの溝が深まりました。その状況に胸を痛めたシドニー・ルイス・ギューリック（1860～1945）が中心となり、全米48州から集められた「青い目の人形」が友情と平和の使者として日本に贈られました。1927年、到着した人形は全国に配られ、人気者になりました。徳島県では現在、アリスという名の人形が1体だけ残っています。

人形の受け入れの中心となったのは、実業家・社会事業家だった渋沢栄一（1840～1931）でした。また渋沢がまとめ役となり、「青い目の人形」のお礼として58体の答礼人形がアメリカへ旅立っていきました。「ミス徳島」もその1体です。

1930年代になると日本は戦争に突入し、1941年にはアメリカなどとも戦うことになりました。そのため、「青い目の人形」は敵国の人形として扱われ、多くが失われました。互いに人形たちを忘れかけていた時期もあり、現在日本には約300体、アメリカには44体の人形が確認されるだけです。アリスもミス徳島も貴重な歴史の証人です。

特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」では、「ミス徳島」が20年ぶりに里帰りし、アリスをはじめ、四国に残る「青い目の人形」の一部とともに展示されます。人形たちの果たした役割を知るとともに、平和の意義を改めて考える機会となれば幸いです。　（歴史担当：長谷川賢二）

Culture Club

砕かれた青銅器！

―誰が、どうやって壊したのか？―

魚島純一

弥生時代を代表する遺物の一つである青銅器。中でも銅鐸は徳島県からも数多く出土していることもあり、徳島県民にはなじみが深いものです。出土する銅鐸の中には、意図的に粉々に砕かれた後に埋められた状態で見つかるものがあります。

青銅器は、銅と錫と鉛の合金でつくられた金属器の総称です。一般的な銅鐸の材質分析の結果からは、銅がおよそ 80 ～ 90%、錫がおよそ 5 ～ 15%、鉛がおよそ 5%というような値が得られます。しかし、このような成分の銅鐸は、金槌でたたいた程度ではせいぜいへこんだり、曲がったりする程度の変形に留まり、とても粉々に砕くことはできません。博物館に展示されている銅鐸の中にも、発掘された際に鍬や重機などがあたったためにへこんだり曲がったりしているものがあるので、みなさんもご覧になったことがあるでしょう。

では、粉々に砕かれた銅鐸はいったいどのようにして壊されたのでしょうか？銅鐸のことを調べている中で、このことは私自身にも大きな疑問の一つでした。

15 年ほど前に、銅鐸の復元鋳造に取り組んでおられる鋳造家の小泉武寛さんと知り合いになることができました。小泉さんは、20 年以上、鋳造家という立場から、弥生時代の銅鐸職人の「わざ」に迫ろうと取り組んでおられます。小泉さんと話をする中で、粉々に砕かれた「破砕銅鐸」の話になったのですが、鋳造家の間では失敗作を鋳つぶして、再び材料として使う際にごく普通に用いられている方法があることを教えていただきました。小泉さんの工房にお邪魔して、実際に見せていただくと、その方法で壊した復元銅鐸の破片の状況が、粉々に砕かれて出土する銅鐸の破片にまさにそっくりなことがわかりました。

その方法というのは、鋳造の際に材料となる金属を溶かすための炉のそばに銅鐸を置き、真っ赤になるまで熱したあと、金槌で軽くたたくという、特別な道具などを必要としない、とても簡単な方法なのです。この方法は、現代でも、鋳造に携わる人にはあたりまえのことだそうですが、鋳造を知らない人にとってはまったく想像もつかない方法です。

図1　復元銅鐸を加熱せずに金槌でたたく。へこむだけで砕けることはない。

弥生時代に銅鐸を粉々に砕いた人たちは、きっと青銅器をつくった人たち、あるいはつくるのをそばで見ていた人たちで、どうすれば銅鐸を粉々に砕くことができるかを知っていた人に違いありません。

青銅器を専門に研究している考古学者でもこのことを知っている人はわずかです。今回、小泉さんのご協力をいただいて、実物とほぼ同じ材質で復元鋳造された銅鐸などを実際に破壊し、実験を行うことができました。復元鋳造にかかった手間や苦労を考えると、破壊するのはたいへん勇気がいることでしたが、おかげで、これまでほとんど知られていなかったことを、きちんと記録し、多くの人に見ていただけるようになりました。

ここで紹介することができるのは、写真のみですが、徳島県立博物館のホームページには、今回の銅鐸をはじめとした復元青銅器破砕実験の動画を公開する準備をしています。

ぜひ一度ご覧いただき、弥生時代の人たちが青銅器を破砕した時の気持ちに思いをはせてみてください。　（考古･保存科学担当）

図2　復元銅鐸を750℃で約5分間加熱した後に金槌でたたく。いとも簡単に粉々に砕けた。

図3　破砕後の復元銅鐸

平成 22 年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業
徳島平和ミュージアムプロジェクト

特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」

昭和初期の1927年、日本とアメリカとの間で、友情と平和の使者として人形の交換が行われたことがありました。しかしその後、日本は中国やアメリカなどとの長い戦争の道に踏(ふ)み込んでいきました。

この展示では、アメリカにある徳島ゆかりの人形「ミス徳島」をおよそ20年ぶりに里帰りさせ、かつての人形交換の意義を振り返るとともに、昭和前半期の戦争の時代について紹介します。平和の尊さを考える機会となることを願っています。

人形交換の中心となった二人

左:ギューリック

下:渋沢 栄一

観覧無料

会　　期　平成22年7月17日(土)～9月5日(日)
休館日：7月19日を除く月曜日、7月20日(火)

展示構成

Ⅰ 人形が結んだ友情―青い目の人形と答礼人形
　1　「青い目の人形」がやって来た
　2　アメリカへ旅立った答礼人形
Ⅱ 戦争とくらし
　1　昭和初期のくらし
　2　戦場へ
　3　戦時下のくらし
　4　1945年７月４日―徳島が焼きつくされた日

アリス
(神山町神領小学校所蔵)

答礼人形「ミス徳島」
(アメリカ合衆国ノースウェスト芸術文化博物館所蔵)

関連行事　(いずれも参加無料)

(１)紙しばい&展示解説
・日時　7月17日(土)　13:30～、15:30～
　　7月18日(日)　同上
　　8月29日(日)　同上

(２)シンポジウム「近代四国における戦争と地域社会」
(第3回四国地域史研究大会)
・日時　7月25日(日)　13:00～16:30
・会場　文化の森イベントホール
・講師　小幡 尚氏(高知大学)、野村 美紀氏(香川県立ミュージアム)、
　　藤本 文昭氏(今治明徳高校)、佐藤 正志氏(摂南大学)

(３)記念講演会「海を渡った人形と私たち」
・日時　8月1日(日)　13:30～15:00
・会場　文化の森イベントホール
・講師　原田 一美氏(徳島ペンクラブ会員)

(４)ワークショップ「絵手紙をかこう！」
・日時　8月22日(日)　10:00～12:00、13:30～15:30
・会場　展示会場
・定員　各回15名(事前申し込みが必要です)

絵師・佐々木家についての資料

江戸時代に、徳島にいた絵師の一族に佐々木家があります。17世紀の後半から19世紀の半ばまで、作品を残したり記録に名をとどめたりして、実に息のながい活動をしています。古くは町絵師や絵仏師のような仕事もしましたが、やがて藩の御用を請けて分限帳に名前が現れ、江戸の狩野家の門人になったことが知られています。徳島市の丈六寺にある曳馬図絵馬は、佐々木信之丞が元禄8年（1695）に描いています。徳島市立徳島城博物館にある養性軒十六詩画巻は、佐々木信照の筆で享保8年（1723）に完成しています。

佐々木家はくわしい系図が残っておらず、名前とおおよその活躍期が、断片的に分かるだけです。徳島城博物館の須藤茂樹氏は、作品と資料を詳しく調べ、以下の人たちがいたことを『史窓』27号（徳島地方史研究会 1997）で報告されています。年号は、確認されるうちの最下限です。

○信之丞：元禄8年（1695）
○信照：元文5年（1740）
○玄仲寿信：享保18年（1733）
○養郭惟照：寛政2年（1790）
○唯照：文化11年（1814）
○忠兵衛信照：天保8年（1837）
○定之丞：元禄8年（1695）
○作之丞：享保15年（1730）
○栄流：享保18年（1733）
○典照：寛政2年（1790）
○晴造：文政11年（1828）
○寿照：弘化2年（1845）

彼らのうち、生まれた年がわかるのは玄仲寿信で、正徳4年（1714）とのことです。ほかは誰についても生没年が不明です。

ところで、明治の終わりから昭和にかけて、地元の絵画史を調べた人に須木一胤（1873―1936）がいます。一胤は住吉派の日本画家で、徳島師範学校の先生でもありました。彼の遺品は、子孫の方から当館に寄贈されています。そのなかに佐々木家の墓碑を調査した記録があり、墓の正面図と戒名・命日が書き留められています（図1）。あるいは過去帳なども見たのかも知れません。

現在では、佐々木家の墓がどこにあったのか定かでなく、記録が採られた時期や経緯もわかりません。それぞれの戒名が、先にあげた誰に当たるのかも曖昧です。しかし没年を記した唯一の資料ですので、以下にその内容をあげておきます。

佐々木家について、どなたか情報をお持ちでしたらぜひお知らせ下さい。

（美術工芸担当：大橋俊雄）

墓碑表　〈梵字〉　先祖代々霊
同　裏　　佐々木晴造／　　唯照
墓台石　　寄附　下山道左衛門

命日・戒名
（墓に刻まれていたのか、別に記録されていたのか不明です）

寛政五年四月五日	養心自郭居士
正保四年九月廿六日	法名義遠居士
明暦元年三月七日	貞悦春清居士
寛文十年二月七日	法悦春哲居士
元禄十四年十二月六日	雪岸貞松居士
享保十年五月廿六日	澤達由信居士
延享四年十月五日	栄海義空信照居士
寛政三年十一月十九日	峨洋院和山栄流居士
天保十二辛丑十月十九日	松雲晴山居士
元治元甲子年十一月廿五日	真性義海居士
慶応二年寅七月廿六日	性圓義通居士
明治二十三年六月廿二日	栄應妙寿大姉
正徳元七月二日	蘭月涼詠信士
元文六年四月十？日	柳雪了源信士
宝暦八十月廿八日	法義円信士

※表記の順序、「?」は原文のままです。

図1　佐々木家墓碑記録（須木一胤採録）

館蔵品紹介 “ラクダムシ” ～駱駝蟲～

ラクダムシ、これは写真（図 1）の昆虫の名前です。漢字では、砂漠でおなじみの動物「駱駝」と昆虫を意味する「蟲」と書きます。昆虫の和名にはいろいろおもしろいものがありますが、このラクダムシも変わった名前の一つでしょう。英語では snake-fly（ヘビのようなムシ）と呼ばれているようですが、これはクビを上に持ち上げるところがヘビの威嚇ポーズに見えるということなのでしょう。「ラクダ」は中胸と後胸の背中側の盛り上がりがコブのように見えるということからこの名前がつけられたようです。

ラクダムシは昆虫の分類群のうち、ラクダムシ目（Raphidioptera）に属し、この目は世界ではオーストラリアを除く広い範囲に分布しています、とくにアジアではかなり多くの種が知られています。このグループの昆虫は、体長が 10 ～ 20 mm、前バネの長さが 10 ～ 15mm の中型の昆虫で、ウスバカゲロウやクサカゲロウなどの脈翅目と近縁なグループです。

ラクダムシ目は、ラクダムシ科（Inocellidae）とキスジラクダムシ科（Raphidiidae）の 2 つの科からなり、日本ではこれまで、ラクダムシ科にはラクダムシ *Inocellia* (*Inocellia*) *japonica* Okamoto, 1917、キスジラクダムシ科にはキスジラクダムシ *Mongoloraphidia* (*Japanoraphidia*) *harmandi*（Navas,1909）のそれぞれ 1 種ずつしか知られていません。

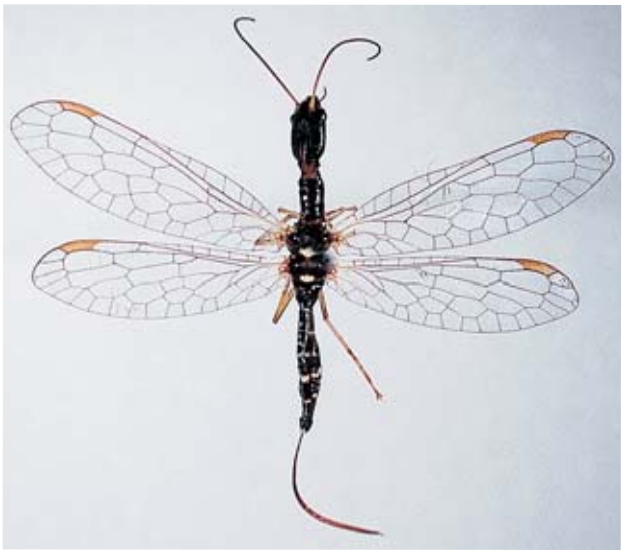

図 1　ラクダムシ、メス成虫。

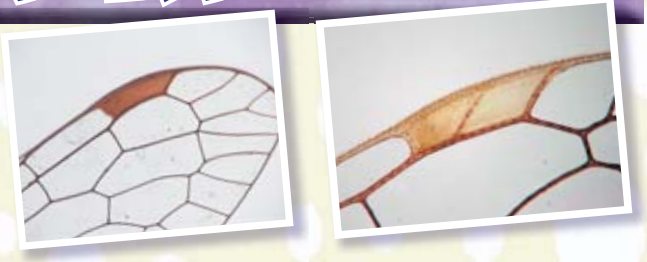

図 2　右前バネの縁紋（左：ラクダムシ、右：キスジラクダムシ）。キスジラクダムシの縁紋のなかには脈が 1 本ある。

ラクダムシ科は、ハネの前の方にある小さな斑紋（縁紋）の中にハネの脈がないこと（図 2- 左）、頭には 3 個の単眼を持たないことでキスジラクダムシ科とは区別されます。海岸のマツ林や、内陸部の中～低山地で採集され、本州、四国、九州から記録されています。幼虫は非常に扁平で、枯れたマツなどの樹皮下で他の昆虫などを捕らえて食べています。一方、キスジラクダムシ科は、ハネの縁紋に 1 本の脈を持つこと（図 2- 右）、頭部には 3 個の単眼を持つことで識別されます。採集記録が少なく、以前は本州中部からしか記録されていませんでしたが、最近、北陸地方や新潟県、紀伊半島、中国地方、九州などにも分布することがわかってきました。徳島県では、上勝町高丸山や剣山系のいくつかの場所で採集されています。キスジラクダムシは海抜 1,000~1,500m ぐらいの、広葉樹の多い地域で得られていますが、いずれの場所でも得られた個体は極めて少ないものです。

ラクダムシは5月中旬、徳島市大神子海岸などのマツ林のなかで見られます。キスジラクダムシは、6月ころから山地に咲くクマノミズキの花で採集された例が多く、網で花をすくうことで採集されるようです。

これまでは、ハネの縁紋の脈や、単眼を持つか持たないかという科の特徴で、そのまま種が区別できていましたので、どこで発見されても、ラクダムシかキスジラクダムシのどちらかの種の報告しかありませんでした。しかし、キスジラクダムシに関しては、形態的には地域によってかなり違いがあり、日本のキスジラクダムシも一種ではなく、かなり多くの種に分化していると考えられます。徳島県産のキスジラクダムシとされている種はおそらく新種であるとみられています。いろいろな昆虫でわかっていないことはまだまだたくさんあるのです。　（館長：大原賢二）

Q&A

常設展の「藍と阿波商人」のコーナーに展示されている

あいだま 藍玉とはどんなものですか？

みなさんは、藍染めを体験したことがありますか?藍染めは、アイという植物（図 1）の葉をかわかし、発酵させた「蓼」という染料でつくった染め液に、糸や布をひたして行います。

畑で育て刈り取ったアイを、細かく刻み、茎の部分を取り除き、乾燥させたものを「葉藍」（図 2）といいます。この葉藍に水を注ぎ入れ、むしろをかぶせて寝せ込み、水が蒸発したらかきまぜ、再び水を注ぎ、むしろをかぶせて寝せ込む。こういった作業を約 100 日の間、繰り返して、葉藍を十分に発酵させると蓼が完成します。黒っぽい、小さな土の塊のような状態になります（図 3）。

さて、藍玉は?といいますと、できがった蓼を臼で搗き固め、乾燥させたものを藍玉といいます。玉藍ということもあります。

徳島は藍染めの染料の産地として有名です。藍の生産が盛況だった江戸時代ごろには、蓼をさらに加工して、藍玉の状態にしたものが出荷されていました。蓼の状態で出荷するよりも利益が大きかったためと考えられています。

図 1　アイ（通称タデアイ）　2010 年 5 月 12 日撮影

展示している藍玉は、一辺が 2 ～ 6cm ぐらいの四角い塊です（図 4）。四角いのにどうして藍玉と呼ぶかといいますと、古くは搗き固めて、丸い状態で出荷していたからだそうです。その後、搬送中の損傷を少なくするために、図4のような角状にして出荷するようになったそうです。蓼を大きな臼で搗き固めたあと、切り取ってざるにうつし、俵につめて出荷していました。

現在では、藍玉を作ることはほとんどありません。染め液をつくる時に細かくくだく必要のない、蓼の状態で出荷されています。

（民俗担当：庄武憲子）

図 2　葉藍

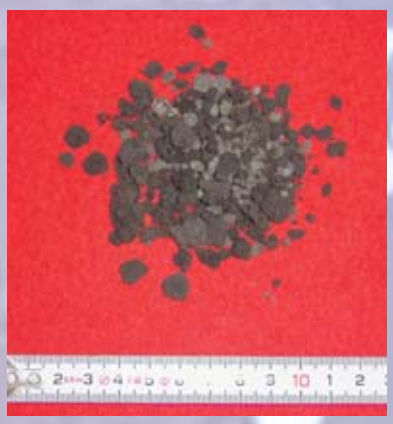

図3　蓼

図 4　藍玉

発行年月日 2010年6月25日
編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山 TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp

７月から９月までの博物館普及行事

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	申込	対象（定員）	備考
歴史体験	勾玉をつくろう	7月18日(日)	13：30～16：00	要	小学生から一般(30)	材料費 100円（大学生・一般）
	火おこし	8月22日(日)	10：00～12：00	要	小学生から一般(30)	材料費 100円（大学生・一般）
歴史文化講座	徳島県内の河童伝承	7月25日(日)	13：30～15：00	不要	小学生から一般(50)	海南文化館
	阿波の画人いろいろ―近世以前―	8月29日(日)	13：30～15：00	不要	小学生から一般(50)	海南文化館
野外自然かんさつ	漂着物を探そう！	7月19日(月)	9：00～17：30	要	小学生から一般(30)	貸切バス
	セミの羽化かんさつ①	7月24日(土)	19：00～21：00	要	小学生から一般(20)	
	川魚かんさつ	7月25日(日)	10：00～12：00	要	小学生から一般(40)	現地集合
	セミの羽化かんさつ②	7月31日(土)	19：00～21：00	要	小学生から一般(20)	
	水生昆虫のかんさつ	8月 1日(日)	10：00～12：00	要	小学生から一般(50)	
	室戸岬の地質見学	8月 8日(日)	13：00～15：00	要	小学生から一般(25)	現地集合
室内実習	貝化石標本をつくろう	7月24日(土)	13：30～15：30	要	小学生から一般(20)	小学校高学年以上
	化石のレプリカをつくろう	8月 1日(日)	10：00～12：00	要	小学生から一般(20)	材料費 100円（大学生・一般）
	標本の名前を調べる会	8月25日(水)	10：00～16：00	不要	小学生から一般	★参照
	ミクロの世界―電子顕微鏡で植物を見よう！	9月12日(日)	13：30～15：30	要	小学生から一般(10)	
みどりの工作隊	押し葉カルタで遊ぼう	8月29日(日)	13：00～16：00	要	小学生から一般(30)	
ミュージアムトーク	クジラの進化―化石でたどる5000万年の歴史―	8月 1日(日)	13：30～15：00	不要	小学生から一般(50)	
	寺社縁起に歴史を読む	9月26日(日)	13：30～15：00	不要	小学生から一般(50)	
部門展示関連行事	部門展示「四国のツキノワグマ」展示解説②	7月19日(月)	14：00～14：30	不要	小学生から一般	観覧料無料
	部門展示「徳島の昆虫―旧博物館の資料より―」展示解説	8月15日(日)	14：00～14：30	不要	小学生から一般	観覧料必要
	部門展示「須木―胤―最後の阿波住吉派―」展示解説	9月20日(月)	14：00～14：30	不要	小学生から一般	観覧料無料
文化の森開園20周年記念	文化の森サマーフェスティバル	8月 7日(土)	9：30～17：00	不要	小学生から一般	
夏休み企画	夜の博物館ドキドキ体験ツアー	8月 1日(日)	19：30～21：00	要	小学生から一般(30)	
特別陳列関連行事	４ページをご覧ください。					

◎小学生が参加する場合は、保護者同伴です。
◎企画展の展示解説は企画展観覧料が、部門展示の展示解説は常設展観覧料がそれぞれ必要です（高校生以下は無料）。

★「標本の名前を調べる会」は、植物・動物（昆虫・貝など）・岩石・化石などの標本の名前を調べる会です。
希望者は採集標本（１人30点以内）を持って、直接博物館までおこしください。定員はありません。

普及行事のお申し込みについて

◎１枚の往復はがきには、１行事だけにしてください。
◎行事日の１カ月前から10日前までに必着で右記までお申し込みください。
◎返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。
◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳しいことは当選された方にお知らせします。
◎原則として、参加費は無料です。

往復はがき記入例

〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
50 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館 普及課	何も書かないでください	50 〒□□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1.参加希望の行事名 2.参加希望者全員名(学年) 3.住所 4.電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館 普及課へ（電話 088－668－3636）